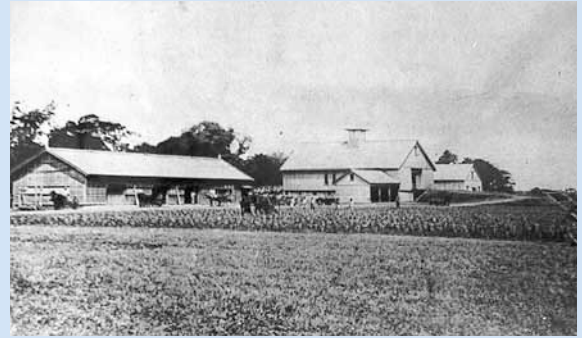




▲北海道種畜場時代（1935年撮影）の真駒内。今の住宅街とは違い、広々とした牧草場が広がっています

札幌市写真ライブラリー所蔵



▲明治初期、開拓当時の牧牛場（真駒内）



▲開拓当時に造られた用水路。百年以上たった現在も同じように水が流れています



◀右肩にフオーク、左肩に子羊をかついだダンの銅像（エドウィン・ダン記念公園内）

## エドウィン・ダンが日本に来たのはなぜ？

明治二年、政府は北海道に開拓使を設置しました。そして、開拓や農業経営の模範をアメリカに求め、ホーレス・ケプロンを開拓使顧問として招きました。ケプロンの助言により東京に官園を設け、北海道に導入する作物の試作や家畜の試験飼育などを行い、順次北海道に送りました。これに伴い新冠牧場、登別牧場、根室官園を開設。札幌官園には牧場も設けました。

しかし、同九年に札幌農学校が開校すると、札幌官園の牧場は同校へ移管されてしまいました。後に、ここにおいて新たに牛や馬、羊などの牧場を開設する計画が持ち上がり、その大任を担うのがエドウィン・ダンだったので。ダンは、一八四八年アメリカのオハイオ州で生まれ、父が経営する大牧場で育ちました。マイアミ大学を中退した後、家業を手伝ったり、伯父の農場で働いたりして牧畜家としての道を歩んでいました。

一八七二年（明治五年）、開拓使から牛の買い入れと牧畜技師の選任を依頼されたA・C・ケプロン（ホーレス・ケプロンの息子）がダン牧場を訪れました。そこで牛を購入し、同時に青年牧畜家エドウィン・ダンを見いだし、開拓使のお雇い農業教師になることを勧めました。当時、この地方の牧畜業は不振の時代であったため、ダンは日本で働くことを決意し、明治六年、約四十頭の牛と約百頭の羊とともに未知の国へ赴いたのでした。ダン、弱冠二十五歳の時でした。

## エドウィン・ダンの活躍

日本へ到着したダンは、開拓使の東京第三官園に勤務し、家畜の飼育や種苗・農機具の選定をする傍ら生徒たちに欧米農法の技術を初歩から教えました。

明治九年、ダンは札幌へ転任することになり、札幌近郊に新しく牧場を開く事業を任せられました。当時、札幌近郊で場所を選ぶ苦労は大変なものでしたが、牧牛場（後の種